ニホンザル伝承と白山麓吉野谷村下吉野にみられた地域住民間の自然・動物観

——下吉野の人びとの身のまわりの自然——

広　瀬　　鎮　日本モンキーセンター

ON THE REGIONAL MONKEY-LORE AND DWELLER'S MIND OF NATURE AND ANIMAL AT SHIMOYOSHINO IN HAKUSAN AREA

Shizumu HIROSE, *Japan Monkey Centre*

I　問題の提起

本論は，石川県石川郡吉野谷村下吉野における住民間にみられる身のまわりの自然をめぐっての意識調査の予備的調査報告である。主な調査，聞き取り事項は，下吉野村住民の一部ではあるが，同村在住の高令者間にみられる自然，動物を中心に自然知識，自然観の実態把握に向けられた。下吉野の自然環境の歴史的変遷を地区住民がどのように知見しているかを直接聴取したが，これまでの白山調査研究委員会人文班調査事項であるニホンザルと民俗に関する調査も行なって，サルと人びとの衣・食・住・生・業・諺・祭祀等への関心も知ることができた。とくに吉野谷村以外の村落にみられる文化事象で下吉野にみられない価値認識へは注意を払った。

下吉野は，吉野谷村村勢要覧（１９７０年)によれば世帯数47，住民総数215人であり一世帯平均が4.6人であった。70才以上の高令者は22人であった。本調査では70才以上の男子2，女子2からの聞取りを行ったのである。

当地域は1922年（大正11）頃から畠作より水耕への転換がみられたが，このことが，野生動物や自然への住民の自然対応観に大きな変化をもたらせているものと考えている。調査対象の情報提供者たちは，下吉野の環境のなかで育ったが，自然接触を通じて多くを学んだのであり，野生哺乳動物との接触の機会はほとんどみられないにもかかわらず，伝承知識のなかに動物たちは存在していた。下吉野は，1960年53戸であったが，1979年には47戸となり，住民も減少している。1975年の行政調査資料によれば第1種兼業の戸数が37であって，このような社会の構造変化が家族社会の構成員にもたらせたものを，今後の調査課題としたいと考えている。

1979年12月25日下吉野山本重孝氏宅にて，山根義雄（73才），吉村茂（73才），小川つぎ（73才），中川ひさ子（72才）4名から，これら情報提供者の自然との対応をめぐる生活史についての聞き取りを試みた。この調査には沼尾周一（中部工業大学附属高校），真野哲三（吉野谷村中学校），山本重孝（吉野谷村自然保護委員）が加わった。

II　ニホンザルの民俗調査から身のまわりの自然へ

すでに，吉野谷村域内におけるニホンザルの民間伝承の収録を広瀬は，1978年以降継続して行なっ

てきた。近年の調査では，ニホンザルにとどまらぬ身のまわりの哺乳動物に対する明治期以後の動物認識の実態をも白山麓各地域での調査対象としてきている。

吉野谷村地域の動物の消長をめぐっての住民自身のとらえ方を1978年以後明らかにしてきたが，本調査では，①サルと生活のかかわり，②サルについて思うこと，③サルについての知識，④下吉野のサルにかかわる伝承，⑤身のまわりの自然および動物についての知見，⑥自然環境の変化について思うことなどの6項目にわたっての聞き取りを行ったものであるが，情報提供者の選出には，地元山本重孝氏の人選によった。とくに女子話題提供者を加え，物質価値間の変遷について明らかにすべく留意したが，聞き取りも従来のニホンザルの民俗調査から身のまわりの自然観認識調査へ一歩すすめたものである。

吉野谷村は，白山麓北部に位置し，村落は9，各村落平均世帯数が49～50世帯となっているが，下吉野は平均世帯数を上まわっている。吉野谷村全体が近年豪雪対策を進め，村道改良や流雪路等の整備，除雪装置の開発・導入等がなされてきてはいるが，今日なお人びとの冬期生活および雪害に対する関心は極めて高い。下吉野の場合とても，このような冬期間の自然，とくに降雪への関心は高かったのである。

また，地域住民の自然観，動物観，物質価値観等の実態把握は，家族・世代間の相違を対象として調査を行なう必要があるが，この種調査は着手されたばかりであるため，今後の調査にまちたい。本調査においてあらわれた情報提供者間にみられた自然環境や動物認識は，これまでの山間村落住民の認識とはことなる点がみられ，農耕を比較的定着して長期にわたって営む村落地区の住民の自然意識の特長がみい出されたと考えている。以下に手取川沿岸に沿う細長い田畑帯における人びとの自然観を明らかにする。

III　下吉野における自然・動物観

すでに広瀬は，1981年中宮（石川県吉野谷村）におけるニホンザル伝承にみられる自然観の変遷について報告したが，本論では，1979年12月の調査における聞きとり情報および現地の自然環境調査をもとに，あらたな知見を加え考察を行った。4名という限られた情報提供者であり，同下吉野地区全体の住民の自然・動物観の抽出とはならなかったのであるが，村民内における自然認識の一端を知ることができたものと考えている。

下吉野では，他の白山麓地区，中宮や尾添にみられたような広く白山麓村落間に定着していた，「サル追い」の伝承残留

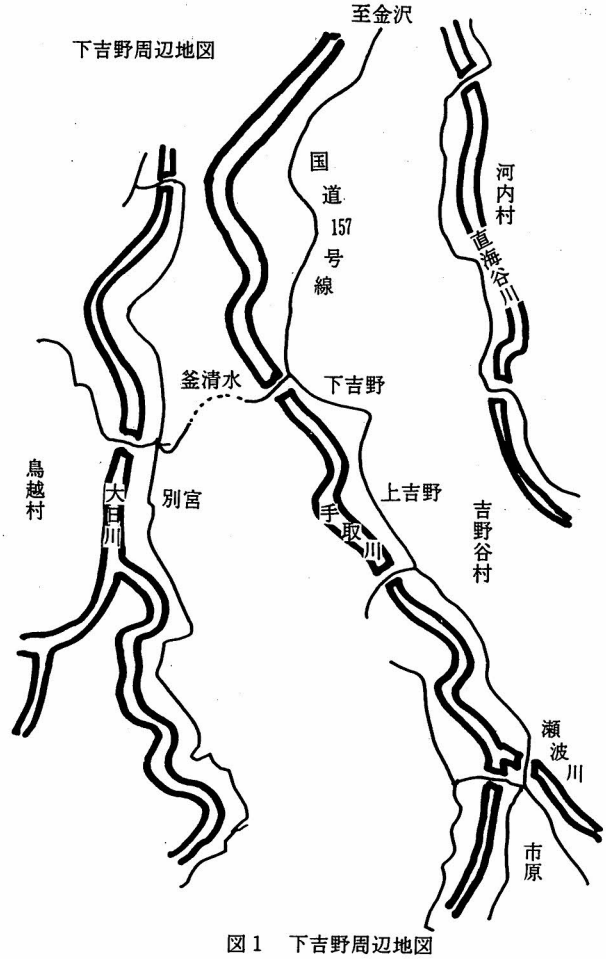

図1　下吉野周辺地図

については聞くことがなかった。また，森林業関係者，狩猟者間にとくに強く伝承されてきた，サルをめぐる禁忌，サルの薬用等の習俗が，本調査時の情報提供者間の意識には明確にはあらわれてこなかった。吉野谷村，瀬波において1972年に収録したサルの頭の薬用効果，薬用としてのサルの小腸の使用，サルを高取引きの対象としたような口承が下吉野では出現しないのはなに故であろうか，瀬波地区の高令者で，〝わしらはサルぢゃけん…〟というようなサルという言葉を蔑視用語として使うような気持も，下吉野ではみられなかったのである。

情報提供者たちは異口同音にこの地域民が健康であること，そしてその理由の一つとして下吉野における水質が良いことをあげ，かつ自慢していた。すでに広瀬は，地域住民の水質認識をめぐる認識調査を，1974年尾口村内の27名を対象として試みた(広瀬1975)。尾口村住民調査では，水の味，水道以外の使用度，附近の川の汚染認識等を調査したものであるが，水の味の変化を認めたもの41%，かわらない37%，わからない22%，川の水が汚くなった96%，かわらない4%，わからない0%，という解答が農業者5，教員・公務員2，会社員4，土木業者1計27名から寄せられた。この27名の内容は，20才代1，30才代6，40才代9，50才代4，60才代4，70才代3名と各世代にわたっていたが，地域住民にとっての水への関心は高いものがあり，下吉野の情報提供者たちの水自慢も，住民間の自然認識のあらわれと考えているのである。

Ⅳ　下吉野におけるニホンザルの伝承

吉野谷村内の各村落におけるニホンザルをめぐる民間伝承の残留のすべてを，いまだ完全に収録し終えていないのであるが，1973年以後のニホンザルの民俗を中心とした聞き取り調査によって瀬波，市原，中宮における薬用伝承その他が収録されている。1971年以降の白山麓調査では，尾添川上流域，住民間のニホンザル伝承の収録に焦点をあわせたが，1974年以後は，伝承の地域比較の目的から，特定村落毎に，高令者層の住民間伝承の収録を行ってきた。

瀬波におけるＳＨ氏はニホンザル狩猟について同地域における狩猟法につき情報提供を行い，ニホンザルの頭の薬用にふれた。市原のＭＮ氏は，サルの頭の黒焼の薬理効果，製作過程などを伝えたのであるが(広瀬・水野，1973)，本調査時，下吉野の情報提供者間ではサルの薬用，食用への関心は聴取しえなかった。下吉野におけるこの種の民間伝承が乏しいのは，果して村民の健康状能が良好に保たれたことによるのかについては，人文班千葉徳爾チームによる白山麓における「近世の死亡調査」に期したい。

吉野谷村地域内の中宮ではサルの薬用例としてヒヤクヒロ（サルの小腸）が産用薬として使いられ，しかも服用に限らず腹にまいて心理的効用を願ったという。

これらは山間生活と医者の存在ともかかわり，医療の手の及ばぬ地における薬用伝承の意味を考案せねばならないのである。

吉野谷村は白山麓北部に位置しながら西部が手取川峡谷に沿っている。下吉野はこの手取川に面しており，石川県南北の交通の要路に沿っているが，近年豪雪対策として村道改良，流雪水路整備，除雪技術が導入されている。しかしながら，情報提供者の4名は，今日なお，冬期の降雪が頭から離れない。雪は一番怖ろしいものであった。すなわち，住民生活に強い影響を与えていたものは野生鳥獣害ではなく，むしろ雪害そのものであった。この点は，これまでのその他吉野谷村各村落との違いとなって現われてきたのである。古くからの出作り耕作に対する食害獣としてのニホンザルの伝承は，中宮，瀬波の場合のように濃厚に出現しなかった。しかしながら今日吉野谷村住民間に，石川県白山自然保護センター設置以後の蛇谷苑地，白山ザルの話題はひろがっており，住民にはニホンザルのマ

スコミに乗った情報の流布現象がおこってきている。中宮のニホンザルの情報は吉野谷村の人びとの動物観，動物知識に何らかの影響を与えつつあるものと考えられるが，とくに「白山猿」は，白山麓では薬用サルの頭の黒焼の代名詞でもあり，サルの頭の黒焼きは国内的にもっとも効用高いものとの評価をうけていたのである。ニホンザルをめぐる民間伝承の内で動物価値観に係わるものとしてこの薬用伝承のもつ意味は大きいのであるが，下吉野においては，むしろサルが文化，文芸モチーフとして登場する点が特長的であるといえよう。

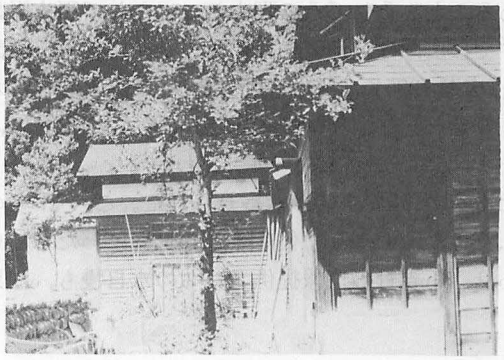

写真1　ヒヤクヒロ（サルの小腸）の伝承の残る中宮の民家

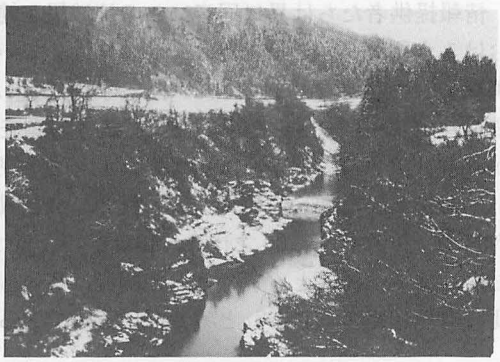

写真2　下吉野から手取川をのぞむ

下吉野，および周辺における民間伝承については山本重孝氏による「猿鏡」伝承の収録があげられる。藩制時代の加賀藩の観光地というべき吉野十景については，「吉野十景考」がある。この著に「寒猿叫」の記述があり，江戸期には，吉野周辺においても野猿がみられたのではないかと考えられる。また山本重孝氏の記憶により戦前1920年頃までには吉野十景の中心に位置する黄門橋にサルが1匹すみついたという（広瀬鎮1981）。この黄門橋下流100 mの所に猿鏡があった。ここに「猿猴掬月」に係わる伝承が何故伝えられてきたのかは不明であるが，深い溪谷に野猿を配した，「猿橋」伝承の類似性が想定される「白山猿」が川へ一つへだたった鳥越の鳥越小学校の校庭に7匹のニホンザルの像が，都賀田勇馬氏によって作られている。「白山猿」が，新たなイメージをもって人びとに迫っているといえよう。

下吉野には〝サルの民間伝承はない〟と山本重孝氏はのべていた。鳥越小学校校長を勤めた同氏がこの学校の白山猿を語る時，地域住民の生活のなかにあるサルの関心が文化・文芸モチーフとしては多方面にわたっている指摘がなされている。白山ザルは，住民のイメージの中に再び登場した。今後ともサルの民俗を地域社会で追求して行くが，下吉野周辺にみられた文芸モチーフとしてのサルのあ

写真3　川一つへだて吉野谷村から鳥越村をのぞむ

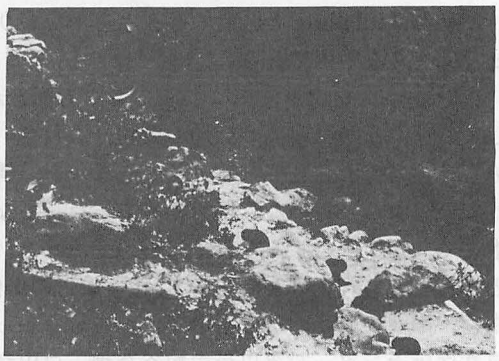

写真4　白山ザル蛇谷のニホンザル

つかいを伝承面で考察するうえで，今後ともこの地域の文化の個有な歴史的推移が問題とならざるをえないのである。

V　下吉野の動物観

下吉野の1975年，吉野谷村村勢要覧によれば，農家数42中，専業4，第1種兼業1，第2種兼業37となっている。そして，農家人には総数で196名，また経営規模別でみると0.5 h－1.0 hが28世帯で一番多い，農産物販売が年間30—100万円未満の世帯が20世帯である。

下吉野の人口動態で特色がみられるのは，下吉野47戸(1979)215名中男子97名，女子118名で，女子が多い。また，1戸に7名をこえる家族構成員はない。75才以上の高令者は10名であった。調査時においても女子高令者が多く，情報提供者に今後さらに女子を対象とした聞き取りを行ないたいと考えている。

下吉野に住んだ中川ひささん他によれば，この村の炊飯作業が大きく変ったのはプロパンガスの使用からであるが，これは，1955年頃から各家庭に入ってきたが，時を同じくしてイロリの使用が激減した。石油ストーブの使用の増加によってさらにイロリの使用がへり，各戸の建変えの都度イロリは姿を消したという。

身のまわりの自然の変化に関しては，情報提供者個々の情報をもとに聞き取りを記録整理した，さらに鳥・獣に関しての認知について聴取を行った。

動物のなかでは，ウサギとの出合いがもっとも多く話題となったが，情報提供者たちも，ウサギにぶつかる頻度が一番高く，ウサギは，下吉野では，ウサギの食用，捕獲，排除についての関心が強かった。ウサギはワナでとらえたが，ウサギの害に対しては，白い布をはさみこんでナワをはって，これを畑に張りめぐらしてウサギがこないようにした。だが，ウサギは，増えたり，減ったりするものであ

		下吉野		
		(1960)	(1970)	(1975)
総世帯数(戸)		53	55	
総世帯員数(人)		240	250	
総農家数(戸)		43	42	42
専兼業別農家数(戸)	専業	13	5	4
	第1種兼業	25	7	1
	第2種兼業	5	30	37
経営耕地規模別農家数(戸)	0.5 ha 未満	8	6	6
	0.5～1.0ha	28	27	28
	1.0～2.0 ha	7	9	8
	2.0～3.0 ha			
	3.0 ha 以上			
兼業種類別農家数(戸)	雇用兼業	21	34	33
	自営兼業	9	3	5
農家人口(人)	総数	212	204	196
	男	93	91	91
	女	119	113	105
基幹的農業従事者数(人)	計	54	69	34
	男	27	14	8
	女	27	55	26
農産物販売金額規模別農家数(戸)	販売なし			8
	30万円未満		6	14
	30～100万円		33	20
	100～300万円		3	
	300～500万円			
	500万円以上			
保有山林	農家数(戸)		38	40
	面積(0.1ha)		3604	4134

図2　下吉野農業集落カード

ると考えられており，調査時においては，ウサギは下吉野では今はへっていると判断されていた。

ツキノワグマは当地域ではみられない。山では,サルを見るが,記憶として1978年秋の1匹ザルとの出合いが語られた。また，カモシカはみたことのあるものは情報提供者中の女子1名，ほとんどの野生動物との出合の中心はイタチであった。イタチは下吉野では，ドバと呼ばれていた。かつては，同地区の畑でできたカボチャ・イモなどを川岸へ放っておくとこれをムジナがとりにでてくるのを見たという。だが，近年そのような川辺への投棄物もなく，こうした野生動物が現われることはなくなった。年々野生動物が人びとの居住地区へ接近しなくなったと理解されていたのであるが，今回の聞き取りでは，いずれもが，ドバのカンニンベ（イタチの最後つ屁）についての口承を知っており，現体験はないものの屁の匂いが興味ある話題となった。このイタチの屁をかぐとネ（猫）が狂うという。

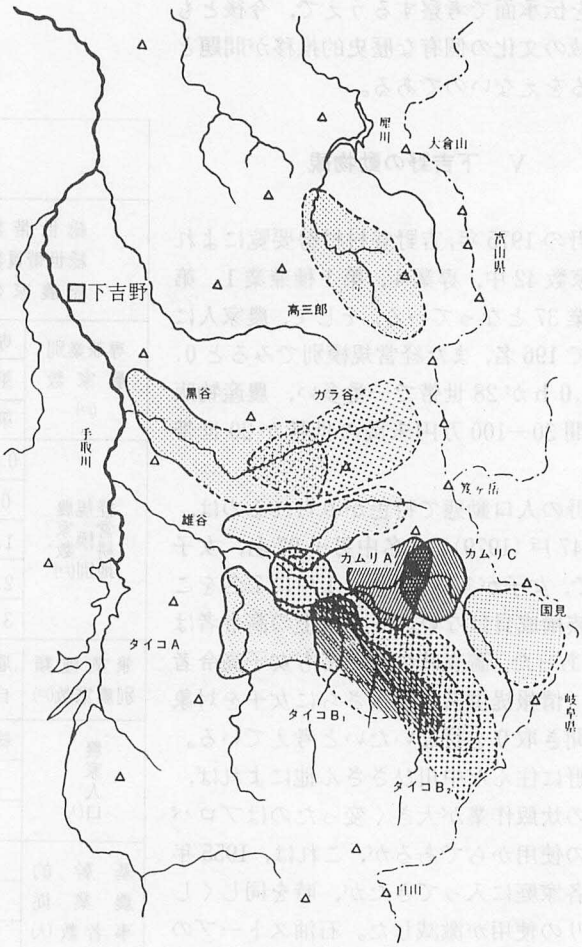

図3　石川県のニホンザルの群れ分布地（破線は推定遊動域，■はカムリA・C群餌付場）（水野 1984）

下吉野には古キツネ伝承が残留しており，過去において村民がキツネを捕えるとその度ごとにこの何百年もたった古キツネの話が語られる。だが，下吉野で山側からキツネが出没してイモ・マメ等の被害があったのは一世代前の事であった。当地域ではタヌキが少ないとみられており，キツネが自然に下吉野からいなくなったのは大正年間の第一発電所の工事以来であると考えられていた。環境の変化に対応した野生動物の消長をこのように認知している情報提供者たちは，キツネをおそれ，カブソ（カワウソ）同様にだます動物という伝承を忘れず記憶していたのである。カブソをこわがる伝承は白山麓各地の川に沿った伝承残留であるが，ミズシ（カッパ）伝承とも競合して村民たちにこれら動物への怖れを抱かせていた。暗くなってミズシに引っぱり込まれる話が，情報提供者から語られたのである。

なお，作害をめぐっては今回の調査では，カラスの害があげられ，1975年はカラスが特に多かったという。しかし，そのカラスは今は少ない。その他農作にかかわる害虫として，コンカムシ(ウンカ)，

写真5　電源開発工事は動物たちの生活を変える

写真6　カブリ伝承の残る犀川上流域の民家

ガメ，アリマキ，キリウジなどがあげられた。白山麓における昆虫による被害については明らかではないか，1975年尾口村調査において村民の害虫名はアオムシ，ジンジロ，コガネムシ，アリコ，テントウムシ，マイマイムシ，タニシ，ケムシ，ネムシ他10種以上があげられている。

VI　環境利用にかかわる自然観と自然知識

下吉野における住民間の自然およびヒトの係わりを生活意識の測面をとらえ巾ひろく聴取することにつとめたが，情報提供者は最近では口がぜいたくになってきたので昔の食品でうまいと思えるものがないとのべている。衣・食・住に関しての問題意識や関心度のなかでも自然利用においての物質価値観の変動は大きい。

下吉野に少年期をすごした情報提供者には，ミズシが手取川やその他の川に住み人をひっぱりこんだ伝説や，川での水難事故の記憶はいつまでものこされているが，情報提供者は子供の頃には手取川の方へは遊びに行かなかったという。

地域における環境利用には，住民間に歴史的な環境認識が強く継承されているといえよう。情報提供者たちの少年期の遊びについては，遊びどころでなく仕事に追われていた，バイタ（薪）あつめ，バイタ割りに年中つかわれていた。そのような日々のなかでも山でのアケビ捕りとアケビの味覚は忘れえぬものであった。

筆者は，これまでに，環白山麓帯におけるニホンザルに限った民間伝承を収録してきたのであるが，本調査のごとくサル以外の動物をふくめ，自然界における生物にかかわる聞き取りを試みてみて，住民の環境利用がいかに個々の自立観の形成に係わっているかを知った。また，自然知識とは生活知識そのものであって身のまわりの自然を知ることなく，自然観の発達はありえないとの感を強くしたのである。本調査のように，自然環境の認識にまで住民の認識調査を進めてみると，身のまわりの環境にすむ野生動物の生息分布と住民の接近頻度にも応じてこれ等動物の話題の出現度が変ってくる。下吉野地区では動物に関する話題が多出していないが，これは情報提供者の生活体験，ライフ・ヒストリーによるものであろう。地域住民間の身のまわりの野生生物に対する自然認識の実態把握こそは，今後の地域の自然環境利用を考える上で重要な作業である。

下吉野にてみられた文芸モチーフのサルは，サルの生息分布と関係なくイメージの伝承化がすすんだものであるが，他地区にみられたようなサルへの嫌好感が著しく現われないだけでなく，キツネ，タヌキ，イタチ等の野生動物に対する感情にも大きな起伏をみることがなかった。ここで明らかなことは，身のまわりの自然接触は具体的に動物との対応の生活史とかかわり，特定の動物感情を形成するということである。

キツネ・タヌキは人間生活の場への接近が近年白山麓に限らず，各県において人口過密地域への進出が報告されている。1983年岐阜県哺乳動物調査研究会の調査においても同様なことをみている。下吉野の情報提供者間にみられた野生動物の村落への接近情報は必ずしも正確なものとはいえないが，昔にくらべて少ないと考えられている。その理由は，居住区周辺でのゴミや野菜等の残飯投棄のなくなったこととしている。これは，白峰地区において聴取した情報とも類似している。なお下吉野では，ウサギ，キツネ等の異状，ウサギ肉にみられる粒状塊や，キツネの脱毛体死亡といった例を聴取することはなかった。

Ⅶ　あとがき

本論では，下吉野では〝猟はいやがられた〟という山本重孝氏談にもうかがえる，当地域の人びとの動物への感情の一端を明らかにすることができたのであるが，伝承面で残留していた呪・禁のなかにあらわれる動物がサルではなく，ミズシやドバであったことは，この地の環境を物語るものといえよう。このことから，人間の生活史と対応した身のまわりの野生動物の自然史を明らかにすることによって，地域共同体の中に形成された動物観の実態を明らかにすることが可能なのである。

確かに人びとの生活態度は急激な社会構造の変化と対応して変ってきている。だが，下吉野の今回聴取した民間伝承は，住民の謙虚な自然接触から生じている自然観に深く結びついていた。ごくありふれた自然として，その変化のないことを恥じる人たちもいた。実は，ありふれたもの，何のへんてつもない身のまわりの自然環境こそ下吉野の人びとの支えともなったのである。

野生動物に対する親愛度や関心度は身のまわりの自然のなかに接した動物へ専せられた。そして伝統的な産業とこれを支えた家族の生活意識が密着し，動物への関心はたかまるばかりであった。

下吉野の4名の情報提供者にみられた動物の習性に関する知識は，いずれも70才以上の高令者のそれであり，畠作，家事等を通じて体験した日常生活がこの地域に長年月にわたり存在していたのである。野生動物に対する親和感や関心度は身のまわりの自然の中に接した動物にむけ高められた。伝統的な産業とそれを支えた家族の生活意識が定着し動物への関心が形成されたものといえよう。下吉野では，動物に関する価値認識はウサギの食用例を除き，食用，薬用に関して著しく特色のあるものを知見しえなかったが，果してこれは村民の良好な健康保持によるものかは，わからない。また下吉野住民間に体験された野生動物による農林業，家畜動物等からの被害体験が大きな動物へのにくしみの感情にも至らず，その種伝承がないことは注目される点ではなかろうか。

本調査に当っては，石川県白山自然保護センター調査研究会，研究事業委託研究費の支援を得た。そしてまた同所職員からの支援をも多くうけた。さらに聞き取りに際し，きめこまかい配慮を賜わった山本重孝氏夫妻の御厚志に厚く感謝する。とくに，地区内4名の情報提供者の方々の御協力に対しては心からの御礼を申しあげます。

文　　献

広瀬鎮・真野哲三（1974）石川県石川郡尾口村および愛知県犬山市今井地区住民にみられる環境意識調査，文部省科学研究特定研究(1)　文部省

広瀬鎮・水野礼子（1973）白山麓のニホンザル伝承て、薬に使ったサル，はくさん第1巻第3号

広瀬鎮（1981）中宮（石川県，吉野谷村）におけるニホンザル伝承にみられる自然観の変遷，石川県白山自然保護センター研究報告第7集

広瀬鎮（1976）石川県石川郡河内村内尾にみられたニホンザルの伝承と白山山麓地域における住民の自然認識と民間伝承

比較論の成立，石川県白山自然保護センター研究報告第3集
広瀬鎮・水野礼子（1975）ニホンザルとの出合いにおける動物観の比較民俗学的考察，石川県白山自然保護センター研究報告第2集
広瀬鎮（1978）ニホンザル伝承分析よりみた白山山麓住民の自然観の特色，文部省環境科学研究報告　文部省
水野昭憲（1984）石川県のニホンザル分布，石川県白山自然保護センター研究報告第10集

Summary

In 1979, author started to examine natural thought and natural contact to environment at Yoshinodani mura, Shimoyoshino in Ishikawa Prefecture.

At the first stage author collected consciousness for nature and animals, and next, author examined how the informers made contact with their surroundings. Environment is the most important and author is approaching to mind of people with their mental back ground and also author compared construction of regional nature contacts minds, then author disclosed the informmant's regional mind of nature at Shimoyoshino district as follows

① Recognition of environment, including animals duly stimulated mind of dwellers and stimulate for evaluation to environment.

② Monkey-lore was not clearly appeared at Shimoyoshino, but the other animal lores are existed now.

③ As cultural motive, monkey lores are existing in Shimoyoshino, not have a contact with wild monkey.

Author will continue to examine dwellers thought for nature among every generations in each family.